東京五輪ボート・カヌーの事前キャンプ地誘致で

ウオータースポーツの盛んなまちに

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会のボートとカヌーに出場する各国選手団の事前キャンプ地誘致を目指して、市と関係団体による誘致協議会を設置しています。今後は、協議会を中心に機会を捉えて本市の持つ恵まれた環境と魅力を発信していきます。

□問い合わせ　健幸まちづくり課TEL26−2111（内線334）

穏やかな流れの笠置峡を武並橋下流から上流を望む

昨年7月に市は「東京オリンピック・パラリンピック事前キャンプ地恵那市誘致協議会」を設置しました。2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会のボート競技とカヌーのスプリント種目に出場する各国の事前キャンプ地誘致を目指したもので、市と経済団体、観光協会、体育連盟、ボート、カヌー競技の関係者ら16人の委員で構成されています。協議会の会長は小坂喬峰恵那市長が、副会長は恵那商工会議所会頭で市体育連盟会長の山本好作さんと恵那市恵南商工会会長の堀鑛さんが務めます。また下部組織として推進委員会が設置され、委員長に市観光協会長で恵那高ボート部OB会会長の阿部伸一郎さん、副委員長は笠置地域自治区会長の樋田一成さんが選任されています。市は事前キャンプ地を誘致することで、観光の振興と地域の活性化、スポーツの振興を図ります。

協議会ではボート競技の練習場として、木曽川の笠置橋よりも下流で笠置ダムと渓谷によって形成された湖である笠置峡を最適地としています。実際に笠置峡でボートをこいだことがある大学や実業団の選手たちは「風が無く水面が穏やか」「橋脚が無く安全」「7㌔連続してボートをこげる」「千㍍を超える直線コースの設定が可能」「自然美が素晴らしい」などと絶賛しています。また近くに恵那峡などの宿泊施設が充実していることも練習場として最適な理由に挙げられました。さらに笠置峡の湖面の穏やかさと広さは、カヌーのスプリント種目にも最適な環境であるとしています。

市内には、笠置峡の他に阿木川ダム湖、小里川ダム湖、恵那峡、矢作ダムなど、ウオーターレジャーを行うための良好でバリエーション豊かな資源を数多く有しています。

本市は昭和40年の岐阜国体で恵那峡がボート競技の会場になりました。また恵那高ボート部が何度も全国大会を制するなどの伝統があり、ボートに対する熱意を持った市民が大勢います。

今月には、誘致活動のシンボルとなるロゴマークデザインが決定します。恵那市を全国に発信できる良い機会でもあるので、市を挙げて誘致を進めていく方針です。

絶好のロケーションも知名度が足りない笠置峡

東京オリンピック・パラリンピック事前キャンプ地恵那市誘致協議会推進委員長
（恵那市観光協会長、恵那高等学校ボート部ＯＢ会会長）
阿部伸一郎さん

笠置峡の魅力

恵那峡は過去に国体やインターハイの大会を行った実績があります。ただし、直線で千㍍のコースを取れませんので、くの字にして取りました。今はオリンピックなどの大会では直線が二千㍍は必要ですので、恵那峡では絶対に無理です。ボートは8レーン分の広さが必要で、笠置峡も今の倍ぐらいの川幅がないと競技場としての使用はできません。

しかし、笠置峡は両側から山が迫っていますので、風がありません。こんなコースは日本にあまりないと皆さんが言います。ボートにとって一番の危険は橋脚です。ボートは、後ろ向きにこぎますので、橋脚に当たると大事故になります。笠置峡は7㌔の間に武並橋が一つあるだけです。しかも武並橋には橋脚がありません。こんな恵まれた練習場はないとボートをこいだ人は言っています。

この自然がもたらした絶好のコースを練習場として少し整備をすれば、大学や実業団などのチームに来てもらえるようになります。

スポーツで観光振興

この4月に恵那高ボート部のＯＢが監督を務める実業団チームが、笠置峡でキャンプを行う予定です。男女合わせて15人から20人ぐらいの選手が来ます。その中には、２０２０年東京オリンピックの候補選手も含まれています。選手たちも1日24時間ずっと練習をするわけではないので、ときには恵那の街に繰り出してもらい、年間を通じていろいろなボートやカヌーのチームに来ていただけるようになれば、スポーツを切り口とした観光振興になります。

信州に菅平というラグビー合宿の聖地があります。日本中のラガーは、菅平に集まって練習をします。岐阜県の乗鞍には高地練習場があって、マラソンや駅伝の選手はそこに集まって練習をします。恵那市にはダムがたくさんありますので、ボートやカヌーなどウオータースポーツのメッカにして、恵那市の観光振興に役立てたいと思います。実際に来てもらえれば、静かで良い所なのは誰もが分かります。

ただ残念なことに、笠置峡の現在の知名度はほぼゼロですから、結局それをＰＲするために、東京オリンピック・パラリンピックという機会を使うことで、最も高い宣伝効果が得られます。ぜひこれをチャンスと捉えて、取り組みたいと思います。

アクセスも抜群

現状、日本でボートの練習ができる所は、大体が人里離れた山奥のダムになります。昨年の国体もインターハイも、ボートの競技場から宿舎まで40㌔の距離がありました。しかも高速道路で行けるような40㌔ではありません。山道の40㌔です。笠置峡であれば、恵那駅から車で15分で行け、恵那峡や市中心部など、近くに食べる所や泊まる所があります。練習場と宿泊地がこんなに近い所は全国にあまりありません。多くの方に受け入れられやすい環境が笠置峡にはあります。

国内には二千㍍の直線コースを取れる練習場は、あまり多くありません。5カ所くらいしかないと思いますが、羽田空港や関西国際空港、セントレア中部国際空港などのどこからもアクセスが良く、ボートは必ず陸送になりますので、高速道路が東京までつながっているという環境を鑑みると、恵那が一番立地条件が良いと思います。

東京オリンピック・パラリンピック競技大会のボートとカヌー、両方を合わせた出場国は、大会近くにならないと確定しませんが、恐らく60～70カ国になります。

日本に練習ができる所はそんなにありませんので、この恵まれた環境を国際舞台や国内の大学、実業団にＰＲして意識を高めていきます。

課題は知名度の向上

現状、笠置峡は練習場としては未開発ですので、公式に認定されたコースではありません。従って、協議会としては独自ルートで、各国にＰＲをしていきます。

皆さんに知っていただくことができれば、環境としては間違いなく日本一だと自負しており、ここに勝るコースは他にないと思いますので、あとはいかに知ってもらえるか。日本一のコースをこれからどうやって広めていくかが課題になります。

地元の方に伺いました

笠置地域自治区会長
（誘致協議会推進副委員長）
樋田一成さん

笠置峡の良さを改めて見つめ直しています。現在、笠置峡は上流の恵那峡のにぎわいと比べひっそりとした感は拭いきれません。

笠置峡のダム湖は豊かな水量をたたえ、水面は広く、流れはあくまでゆったりとしており、「ボート・カヌーの練習場には最適」という声を聞きます。この素晴らしい環境が認識されるといいですね。

今回の事前キャンプ地誘致協議会の設置は、地元の元気のためには大変ありがたいことで、素晴らしさが広く理解され、町を訪れる人が増えることを願っています。

笠置山のクライミングエリアには年間1万人以上の人が来てくれます。２０２０年のオリンピックにスポーツクライミングが正式種目に採用されたことも関心事の一つです。

霊峰笠置山があり、木曽の流れがあり、ゆったりとしたダム湖の水がある。私たちにとっては見慣れた当たり前の景色が、今では日本の財産であり、世界の注目を集める存在になろうとしていることに感慨深いものがあります。

あの感動を再び

本市とボートの結び付きは、昭和40年の岐阜国体で恵那峡がボート競技の会場になったことがきっかけでした。

▶恵那高校のグラウンドで行われた国体漕艇開会式

ボート部の全国制覇

ボート部が誕生したのは昭和35年12月であるが、直接のきっかけは恵那峡が昭和40年の岐阜国体におけるボート競技場有力候補となったからである。

12月29日、県貸与のボートを進水披露させてよりこのかた、苦しいが、しかし栄光への道が島田顧問を指導者に繰り広げられていく。

東京オリンピックの年でもある昭和39年8月、第12回全国高校漕艇選手権大会（インターハイ）が、恵那峡競技場で開催された。集うもの101クルーという本大会創設以来の盛んな大会となり、開会式は4日、恵那高校グラウンドで参加全選手を迎え、力強く挙行された。

競技は5日が予選、6日は敗者復活と準決勝、そして7日に決勝と、記録的な猛暑の中で、800余名の選手が文字通りの熱戦を繰り広げた。本校からは男子フィックス、男子ナックル、女子ナックルの3クルーが出場。そのうち男子フィックス（C市川靜、S鈴木正昭、5今井僚治、4青木泰道、3足立広明、2西尾淳一、B市川季夫）が、見事全国制覇を成し遂げたのである。男子ナックル、女子ナックルも善戦。それぞれ第4位、第6位を勝ち得た。なお38年9月16日の山口国体では、笠木聡臣（3年生）がシングルスカルで全国優勝を遂げ、翌年の東京オリンピックに出場した。

岐阜国体の恵那峡漕艇は、40年9月19日午前8時40分より本校グラウンドで盛大に開幕された。4日間にわたる大会中、恵那高クルーは地元をあげての応援に奮戦したが、男子フィックスが第5位であった。

その後も、中日本レガッタ3年連続優勝（43年～45年）をはじめ、数々の好成績を残して今日に至っている。

▶恵那高等学校『城陵誌　半世紀の歩み』から抜粋

インタビュー

恵那高等学校教諭
ボート部顧問　**夏目達也**さん

栄光に輝く歴史を持ち、市内高校部活動の象徴とも言うべき「恵那高ボート部」の顧問、夏目先生にキャンプ地誘致のこと、笠置峡のことなどを伺いました。

―日頃の練習について

部員は3年生14人が引退したので現在は1、2年生を合わせた20人です。練習は放課後、生徒たちが自転車で午後4時に学校を出発し、恵那峡に着くのが午後4時半。そこからミーティングをして、実際に練習を始めるのは5時ごろで6時半にはミーティングをして終わるという流れです。今の時季は日が暮れるのが早いことと水温が低いため、恵那峡での練習は週末以外はやりません。

冬場はウエートトレーニングとランニング、あとローイングエルゴメーターというエアロバイクのボート用みたいな機械で実際と似たような動きをして、持久力のトレーニングをしています。（下の写真）

―キャンプ地誘致の実現に向けて

恵那市で水辺のスポーツに関わっている団体として、誘致活動にはできる限りの協力をしていきたいと思っています。練習場所が今は恵那峡ですが、観光地でもあり、観光シーズンは遊覧船の便も多くなるので、笠置峡が練習場所として確立したら第2の練習場所として使用できるという面も期待しています。

ただし今の笠置峡は、練習場所と言っても、ただ川があるだけなので、ボートを出すときに手間が掛かり過ぎて、そこで練習をすることは難しい部分があります。今後整備をしてもらえるのであれば、笠置峡は近くに中学校もあり、練習拠点となる価値はあると感じています。

―誘致の可能性

各国のナショナルチームは、国際大会に出場する際に事前キャンプをして、体を順応させてから大会に臨みます。東京でオリンピックがある際も同様ですがボートの練習場所は全国でも限られており、有名な所はいろいろな団体がたくさんいるので、練習するボートの数が多く混雑して、落ち着いた練習ができません。

恵那峡は恵那高ボート部しか活動しておらず、笠置峡は拠点とする団体がいないので、ナショナルチームの事前キャンプ場として、本当に集中した練習ができるのではないでしょうか。

足りないのは、知名度と練習場所として確立していないということだけです。ボートを浮かべた後の状況だけを考えると非常に良い練習場です。

―恵那高ボート部への効果

身近でトップレベルの選手の練習や取り組む姿勢を見ることができるのは、生徒たちにプラスになると思います。プロ野球選手が野球教室を開くと、子どもたちが夢を持って野球選手を目指すのと同様に、ボートでもより上のレベルを目指してつながってくると思います。